

県内離島の歴史・文化・教育施設等の視察・体験研修を通して、教育研究員の今後の教育活動の充実を図ることを目的に、11月19日～21日（2泊3日）の日程で久高島を中心に宿泊研修を行いました。

1日目は南城市の東御廻り（御殿山→親川→場天御嶽→佐敷グスク→テダ御川→斎場御嶽→知念グスク→知念大川→受水・走水→ヤハラヅカサ→浜川御嶽→ミントングスク→玉城グスク）久高島を訪れ、久高留学センターを視察しました。

2日目は、久高幼小中学校で特色ある教育活動について、久貝悦子園長・校長先生からお話を伺いました。その後、福治洋子さんの案内で、久高島の名所・旧跡を実際に訪ねました。

3日目は、久高島をあとにして、首里に赴き、首里城と園比屋武御嶽を視察しました。午後は染め物体験を行い、沖縄県公文書館を視察しました。

下記は教育研究員のみなさんの感想です。

2泊3日の宿泊研修で、上原所長や羽根田先生の温かな見送りの中、研究所を出発しました。

東御廻りには講師の新城さんが同行してくれ、それぞれの霊地で分かりやすい説明してくださいました。すべての霊地で出入りの際には一礼するとい敬意の持ち方も勉強になり、初めての東御廻りの奥深さを感じることができました。

すべての意味を理解できたわけではないのですが、沖縄独特の太陽神を大切にしてきた文化や、聞得大君という存在、御新下りという制度、琉球王府に関するものに触れることができました。
(稲嶺あゆみ)



2日目の研修で、久高幼小中学校を訪ねました。久高小中学校の児童生徒数34名の内、12名は留学センターの子どもたちだということでした。島の子どもたちにとっては学習面などでよい刺激を与えてくれることも多いということ久貝校長先生が話されていました。また授業や給食準備をしている様子や小学校の先生方と中学校の先生方がお互いに連携しながら、一貫性のある教育を支えていることも分かりました。

午後の島内見学は、「イザイホー」という行事を体験している福治さんに各場所や行事についてその時の様子や伝え聞いた話などを交えて案内してもらいました。場所によって神人しか入れない場所もあり、祈りの島であることを感じました。「イザイホー」という行事も1978年を最後に今は該当者がいなくてできない状態であり、形だけの行事として残すのは簡単だが、本来の意味である神人になることはできないという話しを聞き、伝統行事を継承していく難しさを感じました。

夜は昨夜できなかった星座観察を行いました。普段空をゆっくり見上げることが少ないので、久高のきれいな満天の星空を眺め堪能することができました。
(安座名有里)



7年ぶりの久高幼小中学校訪問。授業参観する側でしたが、授業をしている先生のことを自分のことのように思えて緊張しました。複式の授業の大変さを改めて痛感しました。複式クラスでは、教師が1対1で指導している間、もう1人は、自分で問題を読み取り、問題を解くワーク学習をしていた。せめて、あと1人でもいれば話し合い、教え合いの場面もできるのになと思いました。



島内巡りでは、最後の「イザイホー」で神人になった福治洋子さんに年中行事での祈りについて話を聞くことができました。イザイホーの復活については、「似たことはできるはずよ。でもね…。」それぞれ行事での役職がいなくなり復活は無理だろうとのことでした。

久高島の夜空は、星がきれいに見えました。俊雄さんの星座早見盤、義仁指導主事のタブレットの活用で星座観察ができました。ありがとうございました。久高では本島では味わえない、夜の暗さ、冬の訪れを感じる星の透明な輝きを体験でき、人工の灯りはすごいと感じました。

(勢理客貴之)

3日目は、まず首里城に向かいガイドの説明を聞きながら廻りました。首里城は様々な文化が取り入れられている事が分かりました。久しぶりに行ったが、黄金御殿が新しく解放されていたり、復元された御後絵を初めて見たり、新しい発見がありました。



東御廻りの出発地である園比屋武御嶽を見学することができ、感慨深かったです。

紅型、サンゴ染めの説明ではその歴史や技法について学び、綺麗な作品をみることができました。体験では時間を忘れトートバッグにサンゴ染めをほどこしました。

公文書館には始めて行きましたが、公文書をどのように選び、保管しているのかには興味がありました。毎年10tもの公文書をすべてチェックして、分類保管していくのは気の遠くなる作業だと思いましたが、今だけではなく、後世の為に行っていることが分かりました。(比嘉俊雄)

首里城内をガイドつきで見て回り、おおまかに説明してもらえ、今年オープンした奥書院、近習詰所、黄金御殿などを目にする事ができ、今後もこのように一般公開されるまでに、様々な整備が施され、建設が予定されていることがわかりました。過去の歴史を復元しようと試みている方々に敬意を表したいと思います。



紅型工房では1つとして同じ柄がなく、10m程の布が天井からつたって展示されていました。色を塗る必要がない所には、あらかじめロウを塗っておき、色塗りを終えた時点では柄はぼんやりとしているのに、布を洗うとはっきり模様が表れることがわかって感動しました。

公文書館の仕事は、「記録に残す、記録をつなぐ」ことで、教員の業務に似ていると思いました。膨大な文書をひたすら選別し、気の遠くなる作業に気力と体力を必要とするのだと思いました。文書の電子化が進んでも、文書の価値や優先順位を判断するのは人間にしかできないことだと感じました。

(古謝栄子)